

家康と二条城

◎梅林 秀行¹⁾

京都ノートルダム女子大学 非常勤講師／京都高低差崖会¹⁾

洛中地域（京都市内中心部）唯一の近世城郭である二条城は、徳川家康によって関ヶ原の戦い翌年の慶長6年（1601）から築城が始まった。その後、二条城徳川将軍の京都における重要拠点として幕末に至るまで機能し続けた。なぜ、家康は二条城築城を着想したのだろうか。本講演では、家康がこの地に新たな城を築いた背景を、空間的および政治的な観点から再検討する。

注目すべきは、二条城の立地が京都の歴史的都市域の周縁、すなわち後背湿地にあたる点である。古代中世京都の主要な都市域が鴨川扇状地の高燥な段丘上に立地したのに対して、二条城は都市域に隣接した後背湿地に築城され、そこは洪水多発地帯として決して恵まれた環境ではなかった。この点に注目し、二条城築城以前の旧地形を復元的に分析することで、古代から中世にかけて展開した京都の都市域において、二条城が新たに占めた空間位置（位相）を検討したい。

そのうえで、二条城築城時の家康の政治的立場についても考察を加える。後世に続いた徳川政権の安定性を前提として、家康の天下人像がしばしば語られるが、関ヶ原の戦い直後の政治状況はむしろ不安定かつ流動的であり、徳川と豊臣の間には緊張関係が存在していた。そのような状況下で、依然として日本列島の首都機能を有していた京都に新たな城を築くことは、単に京都滞在時の宿舎設営にとどまらず、明確な政治的メッセージを含んでいたと考えられる。二条城築城によって、はたして家康はなにを実現しようとしたのか。

本講演では、二条城の立地環境と当時の政治状況の両面から二条城築城の意味を再構成し、家康がこの城郭によって何を達成しようとし、また何を達成し得なかったのか、その限界をも含めて考察する。